

『生活文化研究所報告』第四十九号
二〇二二年三月刊 別刷

史料紹介

『看聞日記』現代語訳（二四）

藺部 寿樹

史料紹介

『看聞日記』現代語訳（二四）

菌部 寿樹

本稿は、室町時代の皇族・伏見宮貞成（一三七一～一四五六）の日記『看聞日記』を現代語訳したものである。本稿の底本は、小森正明氏代表校訂『図書寮叢刊 看聞日記』二一（明治書院、二〇〇四年）である。難しい語などには※の印を付け、その条の末尾に註を付けた。また、日記原文には改行がないが、訳文は内容に応じて適宜改行した。なお、敬語についてはやや不自然な表現があるが、当時の伏見宮貞成の微妙な立場を勘案した結果である。

○現代語訳（一）～（二二） 応永三三年～二九年（二四一六～二二）『米沢史学』三〇～三六号・『山形県立米沢女子短期大学紀要』五〇～五六号・『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』四二～四八号（二〇一四～二〇二二年）

○現代語訳（二二） 応永三〇年（二四二三）一月一日から四月二九日『米沢史学』三七号（二〇二二年）

○現代語訳（二三） 応永三〇年（二四二三）四月一日から八月三〇日『紀要』五七号（二〇二二年）

本稿で訳出したのは、紙幅の都合上、応永三〇年九月一日から一二月三〇日までの分である。『看聞日記』を現代語訳した経緯などについては、（一）を参照されたい。

本稿により、『看聞日記』の面白さを少しでも多くの方に知っていただき、さらに原文に当たってもらうことができれば、本望、これにすぐるも

のではない。皆様からのご示教・ご叱正を切に望む。

【主要参考文献】

横井清『室町時代の一皇族の生涯』（講談社学術文庫、二〇〇二年、初出一九七九年）

位藤邦生『伏見宮貞成の文学』（清文堂、一九九一年）

小森正明代表校訂『図書寮叢刊 看聞日記』一～七・別冊（明治書院、二〇〇二～二〇一四・二〇二二年）

村井章介『綾小路信俊の亡霊をみた―『看聞日記』人名表記法考―』（同『中世史料との対話』、吉川弘文館、二〇一四年、初出二〇〇三・二〇一四年）

同『『看聞日記』の舞楽記事を読む』（『文学部論叢』一三八号、二〇一五年）

同『『看聞日記』人名考証三題』（『日本歴史』八八二号、二〇二二年）

同『『看聞日記』の引用表現について』（『古文書研究』九二号、二〇二二年）

松岡心平編『看聞日記と中世文化』（森話社、二〇〇九年）

植田真平・大澤泉「伏見宮貞成親王の周辺―『看聞日記』人名比定の再検討―」（『書陵部紀要』六六号、二〇一四年）

植田真平「伏見の侍―『看聞日記』人名小考―」（『書陵部紀要』七〇号、二〇一九年）

田代博志「山城国伏見荘における沙汰人層の存在形態と役割」（『中近世の領主支配と民間社会』、熊本出版文化会館、二〇一四年）

松蘭齋『中世禁裏女房の研究』（思文閣出版、二〇一八年）

九月一日、晴。いつものように月始めのお祝いをした。お祝いには田向前参議らが参列した。

足利持氏反乱軍は手強い

行豊朝臣が京都に出かけた。また幕府軍御旗の銘を書かされるそう
だ。敵方の足利持氏鎌倉公方一味がとても手強いらしい。

御香宮神事相撲、百番ほど良い取り組みだった

今夜はいつものように御香宮の祭礼である。相撲をお忍びで見物した。百番ほど良い取り組みがあつて、面白かった。内本善祐の弟の内本兵庫が相撲十番を立て続けに勝った。

播磨国飾磨津別符に関して妙法院主が口添えする

二日、朝は晴れていたが、昼に雨が降った。円光院主が妙法院殿の御使いとしてやって来た。播磨国飾磨津別符に関して詳しい報告があつた。円光院主は初めて宮家に来たので、すぐに会つた。一献を持参して来たので、一緒に酒を飲んだ。東御方と廊御方も円光院主と対面した。二人は円光院主と以前から知人なのだそう。私は初対面であつた。播磨国飾磨津別符の件では妙法院殿からお口添えをいただき、なおざりにしませんというご連絡をいただいた。その後、円光院主はすぐに出ていった。

琵琶法師の祖一勾当

琵琶法師の祖一勾当（※）が来たが、来客中だったので帰っていった。
※「祖一勾当」：祖一は応永二十五年（一四一八）四月十日に来ており、五年ぶりの来訪である。

腹痛で危篤の椎野寺主、弟子取りの件で母の廊御方を呼び出す

四日、晴。廊御方が息子の椎野寺主のところへお出かけになった。浄金剛院主である椎野のご病気が重態だそう。柳原宮が椎野のお弟子になる件で打ち合わせるために母の廊御方を呼び出した。お腹の病気がひどくて、危篤のご様子らしい。

五日、晴。重有・長資・行豊ら朝臣・慶寿丸と遊山に行った。小松を四本掘り採って宮家東の庭に植えた。

椎野寺主の痼病は絶望的

六日、晴。廊御方が帰ってきた。椎野寺主の下痢は重態で、ほとんど治る見込みがないそう。驚いた。

廊御方の帰り立ち（※）酒宴を田向前三参議以下、寿蔵主が主催した。廊御方のお部屋で酒を飲んだ。

※「帰り立ち」：本来は、朝廷に戻った賀茂社祭使などへ天皇が酒を振る舞うことをいう。ここでは子息の重病に気落ちする廊御方を慰労する酒宴ということなのであろう。

七日、晴。惣得庵主が来た。庵主は椎野の病状に驚いていた。

八日、雨が降った。御香宮御旅所に行った。息子・娘・宮家の女性たちも行った。

さて上皇様の来訪は全国的に不穏な状況なので延期とされた。しかし、なおも強く来訪すると仰るので、明後日に決行することとなった。お供の者たちをしっかりと選ぶそう。

九日、晴。「重陽の節供で佳い時節である。めでたい、めでたい」と予祝した。いつものように御節供のお祝いをした。

田向家は広時の死により触穢

ところで御香宮祭礼はこれまで田向家で見物してきた。しかし今年も田向家の侍である広時が亡くなったため、田向家は穢れている。そこで今年も宮家御所で見物することにした。風流笠などは門内に入らず、お囃子の者たちだけ庭に招き入れた。いつものように見物人たちが群れ集まった。

世尊寺行豊の嫡男・阿茶丸

一献の酒宴を用意するよう禅啓に命じた。田向前三参議・重有・長資・行豊朝臣・慶寿丸・阿茶丸・寿蔵主・稚児の真光らが酒宴に参加した。

行豊の長男である阿茶丸は初参加なので、特に引き出物を与えた。そして祭礼は無事終わった。めでたいことである。

山田宮の猿楽も例年通り行われた。御香宮の相撲にはいろいろな所から大勢取り手が集まり、大相撲となった。それで度々、諍いも起こったそう。翌朝、相撲が終わったという。

十日、晴。獅子舞がやって来たので、いつものように褒美を与えた。

法安寺猿楽を見物に行った。息子・娘の阿五々・東御方・上臈・二条殿を連れて行った。田向前参議・重有朝臣・長資朝臣・行豊朝臣・慶寿丸・阿茶丸・寿藏主・具侍者・梵祐・稚児の真光・女官の賀々らも来ていた。

まず住職のお部屋で一献の酒宴があった。その後、見物席に入った。猿楽が四番演じられた。いつものように猿楽の役者に太刀を与えた。

行豊朝臣が太刀一振りを私に進上してきた。息子の阿茶丸が初めて参加したので、そのお札に進上してきたのである。その太刀をすぐに猿楽の役者に与えた次第である。

その後、いつものように御香宮や権現の猿楽もあった。権現の猿楽はこれまで見物してきたが、今回は省略した。

ところで、上皇様は崇賢門院や室町殿のところへご来訪なさったそう。詳しいことは耳にしていけないので、後で聞いて記しておこう。

浄金剛院稚野寺主は危篤

十一日、晴。浄金剛院から使者が急ぎやって来た。稚野寺主が昨日の夕方から病状が悪化しており、ほとんど死を待つばかりの状態だそう。廊下方には急ぎ浄金剛院へいらっしやうて下さいというので、すぐに廊下方は京都へ向かった。とても驚き歎いた。

後小松上皇行幸の詳細

ところで昨夕、上皇様ご来訪の様子を詳しく聞くことができた。午後三時に八葉の御牛車でご出発なさった。牛車左右の窓には獅子が描かれていたそう。上皇様のご装束は中国伝来の織物に菊や柴束の御

文様があしらわれた御狩衣で、指貫袴は通常通りだったという。お供の公卿や殿上人は皆、織物の狩衣だったらしい。

お供の人々は、御車寄せに奉仕した正親町三条公雅大納言・正親町実秀権大納言・院執権の日野有光大納言・万里小路時房中納言・裏松義資中納言・勤修寺経興中納言、殿上人は日野秀光藏人頭兼弁官・広橋宣光藏人頭兼弁官・山科教豊朝臣・白川雅兼朝臣・飛鳥井雅永朝臣・一条公知、下北面の武士は狩衣を着た五人、上皇御所下級職員は直垂を着た七人、御牛飼い童も直垂を着た七人である。

上皇様はまず室町殿御所へお越しになった。それに先立ち室町殿は上皇御所に行き、上皇様がお出ましになる時、お供したそう。広橋兼宣大納言が前もって室町殿御所に詰めていた。四辻季保参議兼中将・冷泉永基朝臣・日野西資宗も御所に詰めていて、お食事を運ぶ役をした。一献の酒宴が終わった午後十一時に室町殿の御所を出られた。

次に崇賢門院へご来訪になった。一献の酒宴の間、雅楽が二〜三曲演奏された。上皇様ご自身も演奏なさり、四辻季保朝臣と山科教豊朝臣だけが合奏したそう。

最後に上皇様の御弟子方で室町殿の御妹である聖久殿のところへお寄りになってから、御所へお帰りになったそう。崇賢門院からの引き出物は御服で、下級職員は幸末佐にも御服をお与えになったそう。

足利義持が後小松上皇に献上した引き出物

翌朝、室町殿は上皇御所へ御引き出物を持参されたという。御引き出物は紫檀製で平たい鞘の御太刀・お盆に入れた中国製の御道服二着、同じくお盆に入れた砂金三百両、磁器の花瓶七つ、香箱一つ、それに銀製のお盆に載せたお茶土器・金製の土器台・二つの壺・金製の兔足付き菓子置きなどの茶道具、御銚子提、半挿手洗、纏綱縁の御置二帖であった。その後、座敷飾りをすべて献上されたそう。お盆・香箱・花瓶など世に二つとない重宝だそう。幸末佐にも小袖三着・太刀一振りをお与え

になったという。すべてのことが快く、無事に終わったそうだと。
深夜京都の空騒動

上皇様が御所へお戻りになった後、京都市内で空騒ぎがあったという。諸大名の手の者が集まったそうだと。問題だったのは上杉頼方の動向のようだと。このところ、毎晩、市内ではこのような物騒な有様らしい。

翌日、上皇様の身近に仕える公卿や殿上人をお呼びになって、一献の酒宴があったという。砂金一両を公卿に、砂金二分を殿上人にそれぞれご配分なさった。

室町殿からは公卿それぞれに御馬一頭ずつお与えになったが、殿上人にはお与えにならなかったそうだと。

十二日、晴。重有朝臣が浄金剛院へ出向いた。住職の椎野のご様子を尋ねるためである。

貞成の異母兄弟・浄金剛院椎野寺主が痲病で亡くなる

十三日、雨が降った。浄金剛院の僧が急いでやって来た。昨夜の午後九時に、住職の椎野が亡くなったそうだと。およそ予期していた事とはいえ、実際その時に直面して戸惑い、とても驚いた。兄弟の契り厚く、お互いに頼りにしていたので、やはり力を落としてしまった。老母の廊御方を残し先立たれたのは、無常の世の習わしとはいえ、歎いて余りあることだろう。

椎野の後継者は三条家の者にすべし

重有朝臣が帰ってきて言うことには、椎野のお弟子について三条家に行き対面して詳しく相談してきたそうだと。生前に話があった柳原宮のご子息を弟子にするのは、三条家としては望まないそうだと。椎野は母方の三条家代々の由緒があるので、他家の者を弟子にするわけにはいかない。なんとかして三条家の子供かまたは養子なども考慮して、追って連絡しますと、正親町三条公雅大納言は申されたという。

母親である廊御方は嘆き悲しんで、何が良いか考えが及ばないそう

だ。このように遺産継承などの状況も散々なありさまで、廊御方は何ごとにおいても呆然としたご様子だと重有朝臣は語った。とてもかわいそうだと。

用健や惣得庵主がいらっしやあって、椎野のお見舞いをしてから、すぐに帰っていった。

今夜は名月だが、雨が降って残念である。いつものように形だけのお月見をした。かねてから名月の和歌の題を出しておいたが、椎野のことがあつて和歌を取り集められなかった。残念である。

十四日、晴。上皇様へ、ご来訪が無事終わったお祝いの手紙をお送りした。
椎野寺主、浄金剛院中に土葬される

廊御方が浄金剛院から帰ってきた。いろいろなことをお話しになり、悲しみや嘆きで呆然となっていた。今日の暁、椎野は寺中に土葬されたそうだと。今更ながら悲しみの涙を拭いた。お見舞いの客が大勢、廊御方のお部屋に来ていた。

十六日、晴。いつものように身を浄めた。即成院の念仏会に参列した。娘の阿五々や宮家の女性たちや男どもも参列した。

世尊寺行豊一家、勝尾寺や広田神社に参詣する

ところで今日、行豊朝臣は妻子や惣得庵主を連れて物詣でに出かけた。箕面の勝尾寺や西宮の広田神社などに参詣するそうだと。

生島明盛が来た。今夜から朝廷で内侍所御神楽が三晩連続で行われるという。

十七日、晴。退蔵庵主が来た。椎野の事に驚いていらっしやった。冷泉正永も来た。今夜もまた即成院で念仏がある。今日は広時の命日なので、その仏事のための念仏だそうだと。

十八日、晴。光照院良寿房・安楽光院見詔房が、椎野のお見舞いに来た。
足利義持が上杉頼方を討つという噂が流れる

ところで室町殿は今日から清水寺にお籠もりするそうだと。諸大名は

皆、参列するが、上杉頼方一人が京都市内に残るといふ。室町殿が上杉を討ち取るという噂があり、毎晩、物騒な状況となつてゐるそうだ。しかし細川満元前管領や赤松義則らが上杉に加担しているのだから、そう簡単には討ち取られまいと言われている。冷泉正永が帰つた。

十九日、晴。行豊朝臣らが西宮の広田神社から戻つてきた。

正親町三条公雅の子息が後継の浄金剛院主となる

二十日、晴。正親町三条公雅大納言が書状を寄こした。椎野後継の弟子として公雅の子息を寺に入れるそうだ。後継の住職が決まつて、めでたいことである。三条家から続けて三代も浄金剛院主を出すことになり、本来の姿に立ち戻つた。これも仏様の思し召しであろう。

椎野の師匠西音寺長老、触穢のため、門外で椎野の見舞をする

二十二日、晴。西音寺長老が椎野のお見舞いに来た。長老は亡くなつた椎野の師匠である。椎野没後の事を取り仕切つていたので、触穢となつてゐる。そのため、宮家の門内には入らなかつた。それで門を挟んで重有朝臣が取り次いだ。私は面会できなかつた。廊御方も門前で対面した。この長老は八十歳余りになるそうだ。

足利義持、上杉頼方を許す

二十五日、雨が降つた。上杉頼方を室町殿が討ち取るとの噂があるので、上杉は切腹しようとした。ところが室町殿は上杉を清水寺にお呼びになり、上杉を許すと仰つたそうだ。それで連夜の物騒な状況も静まつたといふ。

椎野追悼・廊御方慰安の酒宴

二十六日、晴。廊御方のお部屋で酒を飲んだ。寿蔵主・善基・禅照庵主・禅啓らが椎野のお見舞いとして、この酒宴を用意したそうだ。田向前参議らも参加した。

天王寺妙巖院に娘を入れる契約をする

二十七日、晴。天王寺妙巖院主から書状が来た。先だつて兄・葆光院の娘

を寺に入れるよう約束していたが、いろいろあつて延期となつてゐた。ところが妙巖院主は、兄の娘は寺に入れず、私の娘を入れたいと仰つてきた。私の娘はまだ三歳で幼稚だが、寺に入れる契約することに問題はないと承諾の返事をした。

廊御方のお部屋でまた酒を飲んだ。田向前参議と行豊朝臣が酒宴の用意をした。

二十九日、晴。風呂に入った。光台寺では菊の花を咲かせてゐる。風呂に入る前に見たが、言いようもないほどすばらしい菊だった。庭いっぱいには菊の花盛りだった。

三十日、晴。九月尽くしの和歌会を開くことができず、残念である。去る十三夜の和歌も取り集めたが、披露の会を開けなかつた。これも無念であつた。

孟冬朔（十月一日）、「空は晴れ渡り、すべての事においてとても幸せだ」と予祝した。いつものように月始めのお祝いをした。

東・西に二つの客星が現れる

ところで聞いたところによると、去る頃より客星（※）が東・西の空に現れた。これは最近のことだ。この二つの星が寄り合い組み合い、醍醐辺りに落ちた。西の星は組み合つてゐる内に天に昇つていった。一方、東の星は地に落ちた。それで落下した近辺百メートルから二百メートルの間で、光り輝いたそうだ。その後、星の行方は分からなくなり、消失した。醍醐に住む人々はこれを目撃したそうだ。

西の星が勝つたのは鎌倉叛逆を鎮圧する予兆

醍醐寺三寶院主が足利義量將軍へ連絡して、陰陽師に占わせたところ、これは吉事だとの報告があつたそうだ。西の星は京都、東の星は関東で、東の星は地に落ち、西の星は天に昇つた。それで御吉事だと占つたらしい。鎌倉の叛逆がまだ解決しない状況下で、西の星が勝つたといふのは誠に吉事である。

※客星（かくせい）：恒星と異なり、彗星や新星などのように、一時的に現れる星。

三日、晴。行豊朝臣・慈光寺持経・五辻重仲と一緒に宇治の今伊勢神明社へ参詣したそうだ。その帰り道、持経と重仲は田向家に立ち寄った。それで今夜田向家に一泊して、大酒を飲んだそうだ。

今日は亥子なので、いつものように亥子餅を食べた。

四日、にわか雨が降った。朝早く持経と重仲は京都へ帰ったそうだ。私には何の挨拶もなく、無礼な連中である。

祐誉僧都が椎野のお見舞いとして一献の酒を少し持参してきた。

世尊寺行豊の夢想により、連歌を北野天満宮に法楽する

ところで、行豊朝臣が北野天満宮に連歌を奉納する夢を見たそうだ。それで宮家御所で連歌を詠んで奉納しようと言いだした。そのため急に連歌をすることとなり、夕方になって開始した。会衆は私・田向前参議・重有・長資・行豊ら朝臣・善基・浅野康知である。真夜中に百韻詠み終わった。行豊朝臣がいつものように一献の酒宴を用意した。

足利義持の口入で近江国今西荘代官職は元の通り熊谷に任命する

六日、雨が降った。松崖が取り持つて常徳院主を近江国今西荘の代官にしよう準備していた。

ところが今日、広橋が書状を送ってきた。元のように熊谷に今西荘代官職を命じるよう、室町殿から宮家に伝えなさいと広橋が命令されたそうだ。室町殿の御口添えがある限りは問題ありませんと広橋に返事した。これで、このところの作業がすっかり無駄になってしまったが、しかたのないことだ。

この件について相国寺長老の海門和尚から前もって室町殿に申し上げる手筈であった。しかし、それが遅くなったので、熊谷が強力な縁故を通して室町殿のお耳に入れたようだ。このようなお口添えがなされてしまった以上、もうどうしようもない。

これを契機に、今西荘の年貢を増やすよう、室町殿から代官の熊谷にお命じいただくよう、広橋から室町殿に伝えさせた。

椎野の喪が明ける

七日、雨が降った。椎野の軽い服喪について陰陽師の賀茂在方朝臣に尋ねたところ、今日、喪明けをしてよろしいとのことだった。それで喪服を脱いだ。

広橋から書状があった。今西荘年貢加増をお伺いしたところ、室町殿から熊谷に命じるのは難しいとのことのお返事だったそうだ。この上は、どうしようもないことだ。

常徳院主との契約が破談となり、取り次ぎ役の松崖にとつては不運なことであった。ただ祐誉僧都が元の通り、事務取扱者を続けることができるのは、彼にとつては幸運なことである。

山田香雲庵領地の安堵令旨を発給する

ところで山田香雲庵の領地に関して、私の代になってまだ領地承認の命令書を出していないので、何度も庵主から要望が出されていた。それで今日、その命令書を発給した。領地の目録は別紙とした。この命令書は重有朝臣が執筆した。

四条隆盛朝臣と西大路隆富朝臣と一緒に、椎野のお見舞いに来た。隆富が一献の酒を持参したので、その酒を飲んだ。田向前参議以下がその酒宴に参加した。

隆盛朝臣は連歌が好きなので、懐紙に記録しない連歌の第一句を隆盛に詠みかけた。

冬木まで 問うを待ちける 紅葉かな

残菊にも 花ぞ久しき

隆盛朝臣

今夜、隆盛・隆富両人が泊まってくたので、百韻の連歌を突然始めることにした。善基たちも会衆に加えた。隆盛朝臣は問題なく句を詠む。神妙な者である。隆富朝臣は初心者だ。午後十一時に百韻を詠み終わっ

た。行豊朝臣が京に出ていて不在なので、宮家には人がいない。

村人を刃傷した地侍の内本兵庫を追放した

ところで今夜、内本善祐の弟である内本兵庫が村人を切り付けた。それで、兵庫を伏見荘から追放した。

八日、雨の気配がまだ晴れない。隆盛朝臣が宮家にいるので音楽会をした。楽拍子の万歳楽・三台急・甘州・五常楽急・太平楽急・鶏徳・林歌を演奏した。次に盤渉調の採桑老・蘇合急・輪台・青海波・越殿楽・千秋楽を演奏した。隆盛朝臣・隆富朝臣ともに笙を吹いた。私は琵琶を弾いた。音楽会が終わって、酒を飲んだ。その後、兩人は出ていった。珍しい客人で二日間に渡って徒然を慰めてくれた。

十日、晴。廊御方が浄金剛院へお出かけになり、四〜五日間逗留するそうだ。椎野寺主の喪は、来たる十六日に明けるといふ。

近場の紅葉が盛りなので、一覽しに出かけた。田向前参議・重有・長資ら朝臣・寿蔵主を御供に連れて行つた。退蔵庵・退光庵などを見てまわつた。その後、塔頭大通院に行つた。たいして面白いこともなく、宮家へ帰つた。ただ紅葉だけはすばらしかった。

十一日、晴。天王寺妙嚴院主から書状が届いた。三歳余りでは幼すぎるので、五歳になったら必ず本院にお入れ下さいとのことだった。まずは寺入りが決まって一安心である。再来年の寺入りに問題ありませんと院主と約諾した。

十四日、晴。皆で手分けして書写した法華経一部と銭二貫文のお布施を浄金剛院へ送つた。来たる十六日の仏事に向けて、当方の気持ちを示した次第である。

後継のお弟子は正親町三条公雅の子息に決まつたそうだ。上皇様へ三条家からお伺ひしたところ、問題ないだろうとの仰せがあったという。

ところで、故椎野寺主に預けて置いた琵琶一面を浄金剛院が返してきて。寺家としては無用だということと返却されたようだ。

留守中の廊御方の部屋で酒宴をする

十五日、晴。今夜は亥子である。廊御方のお部屋で酒宴をした。廊御方がお留守なので、皆で酒宴を用意した。田向前参議以下、寿蔵主・禅啓らが酒宴に参加した。

浄金剛院を臨濟宗寺院に変えようという動きがある

十七日、晴。浄金剛院に滞在中の廊御方から手紙が届いた。浄金剛院を臨濟宗寺院にすると、伏見宮家から広橋を通じて室町殿に打診があったという噂があるという。そのことで三条家はとても立腹していて、伏見宮家を恨んでいるそうだ。それで、三条家にそのような事は全くないとご連絡下さいとの、廊御方から要請であつた。

これは当方が全く関知していない事であり、嘘の話に困り果てている。すぐに三条家に書状を送つて、当方は全く関知していないことを起請文（※）の形で示した。

浄金剛院の僧たちが言い出した事であろうか。偽りも甚だしい。

※起請文（きしょうもん）：自分の言い分が嘘でないことなどを神仏に誓う文書。

十八日、雨が降つた。三条家から返事が届いた。室町殿から広橋を通して三条家へ仰られたことは、「亡くなつた住職の椎野寺主は浄金剛院をどうしようもないほどにダメにしてしまった。そのためにこの寺を臨濟宗寺院に変えて、伏見宮家の親類である僧を住職にするので、了承しなさい」との仰せだつたそうだ。

とりあえずは宮家から臨濟宗寺院に変えようとしたというのは偽りだつたと、嫌疑が晴れた。代々念仏一宗だつた寺を臨濟宗寺院に変えることそのものが、仏様の思し召しに叶うものなのかどうか、不審である。まずは驚いたことであつた。それにしても宮家の親類の僧とはいつたい誰なのであろうか。まったく心当たりがない。

十九日、晴。廊御方が浄金剛院から帰つてきた。それで廊御方のお部屋で

酒を飲んだ。塔頭御寮恵芳や村人の芝俊阿・下野良有・三木善理がお見舞いとして一献の酒宴を準備した。田向前参議以下、行豊朝臣らもこの酒宴に参加した。

浄金剛院を臨濟宗寺院に変えることで話がまとまったそうだった。ただし住職を誰にするかは分からない。もしかししたら天龍寺にいる松崖になるかもしれない。松崖本人も全く知らない話だそうだった。

二十日、晴。いつものように風呂に入った。

椎野の遺品

二十一日、晴。椎野寺主が持っていた道具類や代々の和歌集などの歌草子を母親の廊御方がお取り寄せになった。このうち、和歌集や道具類少々を私がいただいた。これらを見ると、悲しみの涙があふれる。後継の住職が決まっていなかったので、道具類もあちらこちらに散らばり、寺は空き家のようなありさまだそうだった。

今の時点で廊御方は道具類を自ら選んで持って来たらしい。お経などはお寺に預け置いたままだという。

ところで去年百首の和歌を詠んだ。冷泉正永も同じく詠んだ。私と正永の二人で詠んで、百首の歌合わせとした。どちらの和歌が良いか、飛鳥井雅縁中納言入道に判定するように命じた。建仁寺の恵西堂が飛鳥井雅縁と縁があるので、その繋がりを通して判定するよう依頼した。

御香宮にお参りした。田向前参議らもお供した。

二十四日、雨が降った。惣得庵主が廊御方のお部屋にいらっしやう。椎野寺主が亡くなったことを追悼し、廊御方を慰労する一献の酒宴をお開き下さった。私や田向前参議らも同席した。

二十五日、雨が降った。椎野寺主の遺産の処分に関して、三条家と書面で相談した。まだ後継者が決まっていなかったので、遺産については放置されたままになっている。どうしたらよいものか。

毎月恒例の連歌会、今回も当番の幹事に差し障りがあるというので、

延期となった。この二ヶ月、ずっと中絶したままだ。

二十六日、晴。田向前参議が京都に出かけた。浄金剛院の事で、広橋と詳しく相談することがあったからである。夕方に田向前参議は帰ってきた。

田向前参議は広橋と対面した。広橋は「先日室町殿がお命じになった以降のことは存じません。どうして重ねてこの件についてお尋ねになれるのでしょうか」と反問したそうだった。

このところ室町殿は因幡堂にお籠もりになっているらしい。それで広橋も因幡堂にいるとのことなので因幡堂に向かったら、路頭で広橋と出くわした。それでだいたいのことを広橋には伝えたそうだった。

その後、田向は相国寺に行き、長老と会った。椎野が亡くなる前に柳原宮が椎野のお弟子になりたいと言っていた件について長老に尋ねたところ、長老は全く知らないと言ったそうだった。

浄金剛院の僧たちは臨濟宗寺院への改宗に反対している

浄金剛院の僧たちが訴状を携えて上皇御所へ訴えた。それを上皇様がご理解なさって、なんとか室町殿へ取り次いでみようという。そうであれば元のように念仏寺のまま、臨濟宗寺院に改変しなくてもすむかもしれない。いずれにせよ、すべては仏様の御心による。

貞成の妻・庭田幸子が妊娠し、着帯の儀式をおこなった

ところで、私の妻二条殿が妊娠して、着帯することとなった。陰陽師の賀茂在方朝臣が今日が吉日ですと占ってきたので、今日、着帯の儀式をすることにした。帯に対する祈禱を智恩院隆守僧正が勤仕してくれた。

夜になって、着帯の儀式をした。田向経良の妻である芝殿がこの儀式の世話をしてくれた。そしていつものようにお祝いをした。

伏見荘租税の算用を小川禅啓が行う

二十七日、晴。廊御方の部屋で酒を飲んだ。伏見荘の今年度租税の収納を

禪啓が準備してくれた。廊御方の酒宴には田向前参議以下、寿蔵主らも参加した。今夜は亥子なので、いつものように亥子餅を食べた。

二十八日、晴。風呂に入った。

浄金剛院住僧の理観・観悟が後小松上皇への訴状を見せに来た

二十九日、晴。浄金剛院住僧の理観と観悟が来た。理観は今回初めて来た。廊御方の部屋で対面した。お土産を持参して来たので、それで酒を飲んだ。田向前参議らも酒宴に参加した。

知俊が起草し浄金剛院から上皇様へ出した訴状を二人は持参してきた。それを開いて見ると、文章は問題ない。上皇様にこれをお見せした。そうだと。きつと問題なく訴えは通るだろう。

故今出川公行の十四歳の娘が小川宮に出仕することとなった

ところで故今出川公行前左大臣の十四歳の娘が、去る十九日、称光天皇陛下の弟である二宮の方と呼ばれて行ったそうだと。母親である陽明禪尼がこの度初めて私に知らせてくれた。それまでは全く知らなかった。とても喜ばしいことだ。

小川宮に仕える女性たちは皆、退いてしまい、一人も宮様にお仕えていないそうだと。勧修寺経興の老母だけが小川宮の身の回りの世話をしているらしい。

そういう状況なので、食事の世話をする者として突然、故今出川公行の娘に白羽の矢が立ったようだと。きつと後小松上皇様のお計らいであろう。まずはめでたいことである。ただし将来的にはどうであろうか、心配でもある。

十一月一日、晴。「めでたく喜ばしい。すべての事においてとても幸せだ」と予祝した。いつものように月始めのお祝いをした。

田向家青侍で広時の息子広輔を伏見荘預所に任命する

二日、晴れていたが、夜に雨が降り出した。田向家の侍で、亡くなった広時の息子である広輔を、伏見荘の預所に任命した。それでお礼のお酒を

広輔が用意したので、廊御方のお部屋で飲んだ。広輔に御扇を与えると、恐れ多いこととご言いますと言っていた。この酒宴には田向前参議らも参加した。

三日、晴。松崖がいらっしゃった。青銅製の花瓶一つを下さったので、うれしかった。

世尊寺行豊子息のお食い初め

さて行豊朝臣の一歳になる息子が、今夜、お食い初めのお祝いをするそうだと。そのお裾分けで、一献の酒を行豊が持参してきた。思いがけないことだった。それで特別に、一包みの沈香・小振りの高麗茶碗・扇を赤子に与えた。田向前参議や行豊朝臣らと祝い酒を飲んだ。

後小松上皇・足利義持に蜜柑を献上する

四日、晴。蜜柑二籠を後小松上皇様に献上した。室町殿へも同じく二籠献上した。取り次ぎをしてくれた広橋にも一籠送った。

夕方に蜜柑の使者が戻ってきた。室町殿は上皇御所へ行かれていますので、お返事は後ほど室町殿から下さることだった。広橋兼宣が言うことには、室町殿へは明後日、蜜柑を差しあげることだった。

松崖が天龍寺へお帰りになった。

六日、晴。室町殿に私の蜜柑を進上したそうだと。

琵琶法師の祖一勾当

七日、晴。琵琶法師の祖一勾当が来た。祖一は父・大通院の時代には度々来ていたが、その後久しく来なかった。珍しい来訪である。平家物語を二〜三句語らせた。田向前参議らも平曲を聞いた。

十三日、晴。後小松上皇様に書状を差し上げた。宮家が経済的に苦しいことを申し入れた。

今日は冬至なので、いつものように風呂に入った。

東福寺乗払

田向前参議と行豊朝臣は東福寺の説法を聞きに行ったそうだと。

十四日、晴。浄金剛院から取り戻した琵琶が破損しているので、大工の源内次郎を呼んで修理させた。

近江国塩津荘・今西荘

十六日、晴。祐譽僧都が一献の酒を持参して来た。近江国塩津荘・今西荘の代官職の件で話があった。

さて鎌倉のことだが、大規模な武力反乱が起こったので、幕府は軍勢を現地に派遣したそうだ。

世尊寺行豊、上杉軍の笠印を書く

その関係で、上杉が笠に記す印を書いてくれるよう、行豊朝臣に依頼してきたそうだ。上杉はそのお礼として、太刀や菱食ひしくいを送ってきたそうだ。

粥順事

十七日、晴。今月はまだ順番で御粥を炊く会をしていないので、寿蔵主に用意させた。田向前参議以下行豊朝臣らが参加した。

十八日、晴。亡き父・大通院の御仏事を今夜から始めた。一昼夜御読経を繰り上げた。読経をしたのは比丘尼たち・寿蔵主・善基・梵祐らと宮家のいつもの男女である。生島明盛が来た。

十九日、父の御仏事を繰り上げた。明日は蔵光庵で別の仏事があり、僧たちに支障があるそうだ。いつものように一時間お経を読んだ。即成院主梵基と具侍者が来た。その他はいつもの面々である。いつものように男女ともに軽食を食べた。寿蔵主が軽食の準備役を辞退したので、女官にやらせた。

蔵光庵で今夜、観音懺法があった。宮家の女性たちや男どもが参列しに行った。

二十日、晴れていたが、夕方、雨が降った。大光明寺に行き、亡き父のためにお焼香した。東御方・廊御方・田向前参議・重有・長資・行豊ら朝臣もお参りした。

島田定直が六条庁官に就任する

ところで島田益直が逝去した後、はじめて島田定直六条庁官が来た。酒一献分の銭を持参してきた。神妙なことだ。対面して、扇を与えた。恐れ多いことですと挨拶してから退出した。

先だって、定直は六条庁官への就任が認められたそうだ。一条庁の安倍資行が定直の就任に反対していたが、室町殿がお口添え下さって、就任が認められたという。その室町殿は今日、伊勢神宮に参拝なさっているそうだ。

蔵光庵の仏事に、鹿苑院主・等持院主・等持寺住職・宗寿院主、その他、住職を引退した方々をお招きしたそうだ。僧たちは総勢百八十人余りになったという。この仏事は、休翁和尚の師匠である文侍者三十三回忌の法要だそうだ。

二十一日、晴。行豊朝臣が近日、京都へ転居するので、餞として連歌会を行った。会衆はいつもの面々だった。一献の酒宴の後、東御方が順番で薪を焼く会を用意してくれた。盃が何度も廻って、数献に及んだ。

行豊は去年の冬に伏見荘に移住してきた。屋敷が宮家の近くになったので、いろいろと御所に来て仕えてくれうれしかった。だから帰京することになって、名残は尽きない。ただ形ばかりの餞を送っただけである。私の第一句は次の通りで。

千代の友 飽かず慣れみん 松の雪

変わらぬ色や 霜の呉竹 行豊朝臣

南朝方上野宮の青侍中村が斬首される

二十三日、晴。京都に出ていた重有朝臣が帰ってきて、世間話をしてくれた。南朝方の上野宮に仕えている中村という侍が、この間、幕府に逮捕された。そして昨夜、首を刎ねられたという。四条隆興少将や飛鳥井雅縁の親類も逮捕された。中村は彼らの仲間なので、捕まえられたそうだ。悪党だからだという。

朝廷の大納言典侍が妊娠した

朝廷に勤めている日野有光大納言の息女である大納言典侍が妊娠したそうだと。

二十四日、晴。等持（※）の遺産である北蔵を相続した者が、この相続を承認したお礼として酒一献分の銭を献上してきた。

※「等持」：未詳。北蔵は土倉であろう。

二十五日、晴。風呂に入った。夜に順番で薪を焼く会を私が準備した。行豊朝臣の送別会を兼ねて薪を焼いた。田向前参議以下、行豊朝臣や行豊の息子である阿茶丸も参加した。

聞くところによると、伊勢神宮から戻った室町殿は、すぐに北野天満宮にお籠もりになったそうだと。

二十七日、晴。朝廷で、洞院満季が右近衛大将を兼任したお礼の儀式をしたそうだと。

世尊寺行豊一家が帰京する

二十八日、晴。行豊朝臣が、妻子ら皆を連れて帰京した。名残惜しいものだ。ただそう思っているのは、私の片想いに過ぎないようだと。いよいよ宮家に人手が足りなくなり、世間体として見苦しい事この上ない（※）。阿茶丸に絵二幅を与えた。これは大光明寺住僧の頓書記が描いたものである。餞の気持ちをただ表したに過ぎない。

鎌倉公方陳謝の使節が上洛する

ところで関東のことだが、建長寺長老と足利家の代官神保某が鎌倉公方の使者として上洛してきた。これは、鎌倉公方の叛逆を室町殿がお許し下さるよう、歎願してきたものだそうだと。いずれにせよ、めでたいことである。

※「見苦しい事この上ない」：原文の「習悪」を醜悪の宛字と解した。

琵琶法師の城竹検校

三十日、晴。琵琶法師の城竹検校が来て、平家物語五句を語った。聴衆は

いつもの面々だった。

十二月一日、晴。「めでたい兆しがあり、すべてにおいてとても幸せだ」と予祝した。

田向長資の七歳の娘が奈良の中宮寺に入る

さて田向長資朝臣の七歳の娘が、明日、奈良の中宮寺に入るそうだと。

それでその娘が別れのご挨拶に来た。中宮寺の長老は、亡くなった玉櫛禅門の娘である。その縁で長老の弟子となり、奈良に赴くそうだと。

二日、晴。いつものように等持寺法華八講が始まったそうだと。

恒例の順番で御粥を炊く会を廊御方が準備した。田向前参議以下、寿蔵主や善基らが参加した。

さて関東のことだが、神保が上洛してお許しを乞うたので、ほぼ無事に終結するようだと。

鎌倉公方足利持氏、毒を盛られる

関東では不思議でめでたい兆しに関する噂が流れているらしい。足利持氏にご飯を差し上げようとした時、八幡の使いである鳩が飛んできて、そのご飯を食べ散らかした。すぐに陰陽師が占ったところ、良い兆しだ答えたそうだと。

そうしたらそのご飯の色が五色になったという。どうもこのご飯には毒が盛られていたらしい。それで取り調べたところ、御膳を調理した者が七人がすぐに切腹したそうだと。その他、仲間の者十七人も逮捕されて討ち殺された。すべてが八幡神による鎌倉公方擁護だと言われている。

足利持氏に対する奇瑞

また桃井宣義ら鎌倉公方退治の軍勢が出陣した時、それに対陣する足利持氏が関東第一の大河である利根川を渡ろうとした。その時、利根川は洪水だったが、すぐに水が落ちたという。それで持氏の軍勢は問題なく利根川を渡り、桃井軍に勝ったそうだと。

このような不思議で珍しいめでたい兆しなどが噂されている。ただし

本當の事かどうかは分からない。
梵基が梵祐に即成院主職を譲与した

三日、晴。即成院主職を院主の梵基上人がとても老齡なので、梵祐にお譲りになるという。また梵祐の知事職は善基が受け取ったそう。院主職の譲与を宮家が承認したお礼として、梵祐と善基が一献の酒を持参した。その酒で酒宴をした。酒宴には田向前参議からも参加した。

六日、晴。毎月恒例の連歌会、いつものように田向前参議が当番幹事として準備した。会衆はいつもの面々である。ただ参加者が少ないので、午後十一時三十分には百韻が終わった。

八日、晴。長講堂六月八日お供え米のこと、当年の伏見莊はひどい水害なのでこの役を勤めることができない。そのことを長講堂事務取扱者の土御門資家卿に連絡するため、田向前参議が長講堂に出向いた。

九日、晴。田向前参議が帰ってきた。お供え米の件で事務取扱者に面会して詳しい事情を説明したところ、そのように上皇様へ報告するわけにはいかない。なんとしてもお供え米をお出し下さいと返答されたそう。なんとということだろうか。

幕府近習の海老名に天神名号の掛け軸などを貸し出す

行豊朝臣が来た。先日、天神名号「南無天満大自在天神」の掛け軸や脇に懸ける絵などを借り出していた。それを今、返してきたのである。幕府近臣である海老名の屋敷で連歌千句の奉納があった。その座席にこの名号を懸けたそう。丸一日で千句を読み終わったそう。

十日、晴。亡くなった母の命日である。父の塔頭大通院でいつものようにささやかな法事を営んだ。

足利義量、将軍として初の参内・院参

十二日、晴。今日、足利義量将軍が朝廷や上皇御所へ行かれたそう。これは征夷大将軍に任命されて以降、初めての事だという。将軍は衣冠束帯姿だった。山科教豊朝臣が御太刀持ち役、白川資兼朝臣が沓持ちの役

をした。山科家・白川家は、たびたびこれらの役をしてきた。それが良い先例となっているそう。

諸大名も皆お供した。室町殿も同じく朝廷や上皇御所へ行かれた。足利家近臣の公卿や殿上人もほぼ全員がお供した。最初に朝廷、次に上皇御所へ行ったという。それぞれで一献の酒宴があったようだ。

妻の女兒出産は不運の至り

十四日、晴。明け方、妻の二条殿が産所となっている実家の庭田家へ出ていった。午前七時に女兒を安産したそう。無事出産したのは、まずはめでたい。ただ最近、世間で男児が不足している。それで女兒は無用であり、不運の至りである。

産穢を避けて、急ぎ御香宮へ参詣する

御香宮へ参詣した。産穢になるだろうから、その前に急いで参詣したのである。

安楽光院長老が来たので、対面した。年末の挨拶に来たそう。

貞成、眼病になる

十五日、晴。行豊朝臣が来た。私は昨日から眼の病気である。このごろはあちこちで大勢の人が病気で苦しんでいるそう。

眼の痛みは不浄負けによるもの

十九日、晴。昨夜は一晩中、そして今日も半日、言葉にできないほど眼が痛かった。重い病状だ。心身ともにどうして良いかわからない。それで巫女に占わせたところ、不浄負け（※）だそう。すぐに御香宮に対してお詫びした。そうしたら夕方から苦痛が少し治まった。

四条隆盛が善勝寺長者となる

さて四条隆直大納言が今日、出家したそう。そして鷲尾一族の氏寺である善勝寺長者職を四条隆盛朝臣が相続したそう。今回は鷲尾隆豊朝臣が長者となる順番だったが、隆豊が上皇様の怒りに触れたので、隆盛が長者に任命されたのである。隆盛としては幸運の至りであろう。

聞くところによると、今日、勸修寺経興中納言の屋敷で千句の連歌会があつたそうだ。これは勸修寺家内に祀っている天神様へ奉納するものだという。第一番の句は後小松上皇様、それに仁和寺御室御所・妙法院主・室町殿・二条持基左大臣らが句を申し出ているそうだ。

※不浄負け（ふじょうまけ）：穢れた身体で神事及びその関連事業に携わつたことによる体調不良などの症状をいうか。ここでは、妻庭田幸子の産穢に触れたまま御香宮に参詣したことが、貞成が不浄負けとなつた原因ということにならう。

二十日、晴。勸修寺家の千句連歌、今日で満願になつたそうだ。陰陽師の賀茂在方朝臣が来年の暦と八卦占いの本などを献上してきた。室町殿は清和院にお籠もりしているそうだ。

二十一日、晴。眼の病気は相変わらずだが、痛みは少し和らいだ。

二十三日、雨が降つた。陰陽師の土御門有盛・同有清ら朝臣も来年の暦と八卦占いの本などを献上してきた。

二十四日、晴。寒い嵐が吹き、雪が風に吹き交じつた。しかし雪は積もらなかつた。今年は初雪がまだ降らない。陰陽師の清隆朝臣が年内に雪は降らないだろうと占つたそうだ。

二十五日、晴。京都市内では雪が少し積もつたそうだ。しかし伏見辺りは積もっていない。室町殿が細川満元前管領の屋敷に入つて、雪景色をご堪能になつたそうだ。

二十六日、晴。町経時朝臣が来た。しかし眼の調子が悪いので対面せず、すぐに帰つた。上皇様に書状を献上した。歳末のお礼状である。

貞成三女の髪削ぎ・魚味の祝い

ところで私の三女の御魚味の祝いをいつやつたらよいか、陰陽師の賀茂在方朝臣に占わせた。

まず伸びた髪のを肩の辺で切り揃える髪削ぎの儀式をした。髪を切る役は長資朝臣がしてくれた。次に魚味の儀式。田向前参議が魚を娘の

口に含ませる役をしてくれた。そして一献の祝宴となつた。宮家の女性たち・芝殿・田向前参議・重有朝臣・長資朝臣・行豊朝臣・慶寿丸らが参加した。ただし、私の妻二条殿は産所において、いまだ宮家に戻つてきていない。綾小路前参議が酒樽を進上してきた。酒宴は数献に及び、音楽もあつた。めでたいことであつた。

二十七日、晴。いつものように煤払いをした。西大路隆富朝臣と祐誉僧都が来たので、酒を飲んだ。そしてすぐに出ていった。

節分なので廊御方の部屋に方違えする

今夜は節分である。それで方違えのため廊御方のお部屋に行き、一泊した。一献の酒宴があり、田向前参議らも参加した。

足利義持、勸修寺邸にいる小川宮と会う

聞くところによると、室町殿は今日、勸修寺の屋敷にお入りになつたそうだ。勸修寺邸に寄宿している小川宮へご挨拶されたそうだ。

立春を強飯で祝う

二十八日、晴。「立春の佳い時節である。めでたい兆しがあり、すべての事に満足している。とても幸せだ」と予祝した。いつものように強飯でお祝ひした。

綾小路信俊前参議が来た。夏以降、宮家に来ていなかったのが、珍しい来訪でうれしい。すぐに音楽会をした。壺越調の鳥急・颯踏入破・賀殿急・陵王破と朗詠をした。その後、酒を飲んだ。お土産で綾小路がこの酒宴を用意してくれた。一献の酒宴が終わつて、綾小路はすぐに出ていった。

二十九日、晴。十二月で身を浄めるため、いつものように風呂に入った。夜、順番で薪を焼く会を重有朝臣が準備してくれた。この会には田向前参議らが参加した。まだ二三人が当番の幹事役を勤めていない。来春の勤仕となるだろう。

三十日、晴。蔵光庵主がいつものようにいろいろな進物を持って来てくれ

た。惣得庵主も来た。寺庵の僧たちが年末年始の挨拶に来た。毎年今日、僧たちが参賀に来る。それが佳い例となっている。いつものように、除夜のお祝いをした。来年の春もめでたい事があるよう、ひたすら祈念した。

宮家の雑事、全国のうわさ話などを詳しく記録した。とても憚りがあるので、他家の者には見せてはいけない。

(続)